

大地から小さな学校のおたより

ブラジル第3アリアンサ富山県日本語学校便り NO16 11月号

日々暑くなり、冷たい飲み物がほしくなる時期になりました。この頃になると、雨期に入ります。今年は例年より雨が多く、電話回線も不通になることも多くあります。また落雷による被害も多く、火事の他、牧場の牛に直接落ちてしまうこともよくあるそうです。

今月は、日本語能力試験の勉強と学習発表会の練習で大忙しでした。子どもたちは日本語が日々上達し、1年前、私が日本語を話しても不思議な顔をしていた子どもたちとは大違いです。もっともっと日本語が上手になってほしいです。



学校に馬が迷い込んできました！

昔、私が小学校の頃、校庭に野良犬が迷い込んできた時、「犬だー」と言って大騒ぎしたことを思い出しました。この学校では、「馬だー」と私は叫んでしまいました。「ヒヒー——ン」と馬の鳴き声が聞こえたので、外に出てみると、白馬でした。ちょうど「スーホの白い馬」を勉強していた時だったので、何というタイミングだと思ったのですが、子どもたちは「あうま…」とあまり興味がなかったようです。

最後のカラオケは「千の風になって」で締めくくりました。

今年に入ってカラオケ大会は3回目の出場となりました。今回は紅白歌合戦でした。いつもいやだいやだと言って子どものように駄々をこねていましたが、それも今回のカラオケ大会で最後となりました。常連にもなってきたので「今年の司会はどうやって笑わせようかな」と私なりに準備をしていたのですが、今回は残念なことに司会の依頼が来ませんでした。なんともがっくり。司会をすると実は緊張がほぐれて、歌も歌いやすかったのです。司会がないとなれば、緊張は一気に上がりました。

私が歌った曲はなんと「千の風になって」です。「カラオケ嫌いの人間が歌う曲ではないだろう」そんな声が遠く日本から聞こえてきそうですが、歌ってしまいました。歌い終わると「上手だったね」「圧倒されたよ」「私の好きな歌を歌ってくれてありがとう」少なくとも5人に言われてしまいました。なんか子どもの気分でした。うれしかったのです。上手だなんて言われると、あの頃を思い出してしまいます。

私は小学校の頃、音痴だと言われていました。みんなに笑われたり、耳をふさがれたりしてから、歌嫌いになったのです。音楽の授業は大嫌いで、中学生の頃にはいつもトイレに逃げ込んでいました。人が歌う姿を見るだけで、血の気が引くほどだったのです。だから芸能人のコンサートは一度も行ったことがないのです。ここアリアンサに来てから、そのトラウマが少しずつなくなってきました。なんとなく失った時間を取り戻したような気がしています。そんなアリアンサの人たちに感謝の気持ちも込めて、お別れの曲を歌わせていただきました。おそらく私が日本に帰れば、一生会うことができない人たちです。少しでも胸の中に何か残っていればと思っています。



スーホの白い馬が完成しました。

およそ半年前から取り組んできた、影絵劇「スーホの白い馬」がとうとう完成し 12 月の卒業式に発表するだけとなりました。影絵、大正琴による演奏、朗読、この半年間子どもたちは、この物語を通して、色々なことを勉強してきました。ステージ練習では、子どもたちが自分の動きを理解すると、先生が何も言わなくても、自分たちでお互いに助け合いながら、取り組む姿が見られるようになりました。時には泣いたこともありました。時には悔しくて先生に「これもういやだ」と言ってきたことも何回もありました。

でも、一つのことのでき、そしてもう一つのことのできるようになり、繰り返していくうちに、子どもたちの目は変わり、今ではお互いに、「ここはダメ」「ここは〇〇さんがしっかりやる」など、自分たちの責任において動く場面がとても多くみられるようになったのです。

実は、私がブラジルに来て一番驚いたことは、子どもたちの姿でした。自己責任であったり、互いを助け合う精神だったり、そういったことが欠如していると思ったのです。自分のことだけが大切だ。相手のことはどうでもいい。そういった中で、いかに子どもたちに、そのことを教えるのかを悩んできました。つまり、日本語を学ぶことよりも、そのことを伝えることの方が、実は日本的であるような気がしたのです。

「けんかをしてはいけません」「思いやる気持ちをもちなさい」「後片付けをしなさい」「わがままを言うてはいけません」そういうことは、私が幼い頃よく耳にした言葉です。いざ教師になってみると、そのことを伝えることがいかに難しく、いかに大切であるかを実感しています。もしかするとこれは日本も同じかもしれませんね。

この物語には、とても大事なメッセージが含まれています。動物を大事にする心、家族を思いやる心、社会の理不尽さを受け入れること、物を大切にすること、かけがえのないものを持つ幸せ、この半年間で子どもたちはとても成長したように思います。そして自分もこの影絵劇がここまでの効果をもたらすとは思っておらず、驚いています。日本の方々にこの影絵劇をお見せできないのが残念でなりません。地球の裏からですが、応援してくださいととてもうれしいです。



「大地の日記」が展示されました。



私が美術作家であることは以前お伝えしました。私はいつも不思議に思っていることがあります。体育の先生がスポーツをしていて国体に出る、オリンピックに出ると聞けばとても素晴らしく見えます。だけど美術の先生が絵を描くと趣味だと言われてしまいます。

私は美術教師である以上、子どもの前に立つときは世界的に活躍する作家でありたいと常日頃思ってきました。そのために私は世界各国で展覧会をするようにしています。いくら趣味だと言われても、いくらお遊びだと言われても、その姿勢を貫くことが美術教師としてそして自分の生き方のように思います。

おかげさまで、どこからかそのような噂を聞いて、ここミランドボリスの展覧会に招待を受けて展示することが実現できました。ブラジルで制作した「大地の日記シリーズ」を展示することができとてもうれしく思っています。私の夢も一つ実現できてよかったです。そして、いつか日本の子どもたちにその様子を伝えることができたらと思っています。